

—臨床医学序説の議義を顧みて—

奥 田 六 郎

福井医科大学副学長

(昭和57年11月4日 受理)

I 緒 言

本学では、昭和55年の開学以来医学概論は必須課目とし、一回生を対象に二単位を教授することになっている。前半の一単位は基礎医学系の生化学専攻の教官が担当し、後半の一単位は臨床医学系の小児科学専攻の筆者が担当している。

医学概論を担当する誰もがそうであるように、医学概論とは何であるのか、どのような内容をどのように教授するのがよいのかという難問に筆者も直面し、何冊かの本を読んだ^{1)~7)}。阪大の澤瀉教授は、田辺 元博士の「科学概論」にならって哲学的「医学概論」を講述したものをまとめ「医学概論」科学について、生命について、医学についての3部作として出版された。¹⁾この哲学的「医学概論」から、医学入門、医学序説、医学通論に至るまで様々のものがある。更に最近では産業医科大学講義集として苦心された「医学概論」が発刊されている⁵⁾⁶⁾。これらのことは医学概論と呼ばれるものの内容が様々であることを示している。阪大中川教授の医学概論の授業に関する調査では、“医学生に医学・医療の全体像、あるいは基本的構造、あるいは医師としての行為指針を與えることを特に意識してなされる授業”と規定している⁸⁾。

扱、本学で行われている医学概論の前半の一単位は表1の如くである。また、後半の一単位は筆者が臨床医の立場から行ったもので、昭和56年度のものは臨床医学序説で表2に示す如くである。この後半の一単位について、昭和55年度と56年度と2年間に亘り試行錯誤した授業経験の一部を赤裸々に綴ると共に、本学の医学概論ではどのような事が行われているかを一般教育担当の教官の方々に知っていただくことが本稿の目的である。

II 本学一回生の実態

1. 入学直後の学生の実態

本学では昭和56年4月に4日間に亘り“医学教育”をテーマに一般教育の教官と専門教育の教官(内定教官も含む)の合同討論会がもたれ、有意義な医学教育に関する意見の交換が行われた。詳細は省略するが、自学自習する態度を持つ学生を育成し、卒業後よい臨床家になることを目標とすることではほぼ意見の一致をみた。

この討論会で筆者が最も驚いたのは、自分には現在の大学新入生のことがまるで解っていないという事実であった。例えば“入学直後の学生の中には葉書は書けるが、自分の意見や考えをまとめて述べる手紙は仲々書けない者がいる。手紙を書くよりも電話で用件をすませてしまう。また、余り本を読んでいない。岩波文庫とか岩波新書の名前さえ知らない学生がいる。このような新入生に対して、挨拶、文章の書き方、読書などに関する指導をして2～3カ月経つと漸く従来からの学生に近い应答、態度が生まれてくる…”。こんな発言を新聞等のマスコミの媒体からではなく、本学の教官から直接きかされた事はショックであった。その理由は、昭和55年度の医学概論Ⅱの成績評価に際し、“癌患者をみとる場合、医師の立場にあるとして君は患者に病名を教えるか、否かについて論ぜよ”というテーマでレポートを提出させた。その時、河合隼雄教授の“医療における人間性について”⁹⁾のコピーを各学生に一部づつ渡すと共に、レポートには引用文献の明示を要請した。1カ月半後、学生諸君はやや自主的立場が欠けている点を除くとある程度のレベルのレポートを提出していた。これは、一般教育担当教官の教育の賜という事を筆者が知らずにいた訳である。本学の新入生の全部ではないにしても、受験の為に精神的にも正常発達抑制状態にあることを教育討論会で教えられたのを感謝する。

2. プレテストについて

上述の経験から、医学概論Ⅱの講義をするに当り、対象学生の全般的な状態を知る為に、故吉岡教授のものを参考にしてプレテストを行った¹⁰⁾。筆者の実施したプレテストの内容は、一般教養に関するもの、廣義の医学の範疇に入るもの、その他で計25問からなっている。その他には、性格テスト、読書、将来の進路などを適宜入れてある。

テストの結果の詳細は省略するが、まとめていえば学生全体のレベルは私の予測よりもかなり高水準にあり、意を強くした。但し、高水準の結果を得たのは設問が記憶力によるものが多すぎたのも理由の一つかもしれない。

3. プレテストからみた読書について

プレテストの中に読書に関する出題をした。その分析結果を少し詳細に述べる。

出題 君の読書について次の事に答えよ。

- (1) 本学の合格通知を受領後一学期末までの期間
- (2) 夏期休暇の期間

以上の期間に読んだ本の題名、著者名、夫々の本毎に100字以内の短評を記す。但し、期間別に(1)、(2)とわけること。

本設問に際し筆者が意図した点を述べる。

1) 大学新入生が受験から解放された後の読書の実態を知り、読書に対する意欲、傾向を知ることが目的とした。

2) 受験勉強のためにやむを得ず読書欲が抑圧されていたとすれば、合格通知受領後入学までの期間、あるいは一学期末までにどのように読書に立ち向かったか。

3) 夏期休暇中の計画に読書が一つの目的として置かれていたか。

4) プレテストは予告なしに、講義の第一回目に実施した。従って書名、著者名、短評は突然求めたもの故、しっかりと読んだものでないと解答はし難く、学生の読書に関する状態がある程度把握出来るであろう。

5) 実際には本を読んでいても書名、著者名、短評の3項目の要求を満たせずに書けなかった本もある筈である。読書に関しある程度の反省が生まれることを希望した。

扱、読書調査をまとめて表3に示す。この統計をとる時の方法と得られた結果に対する感想を列記する。

1) 書名に従って本を小説と教養の2種に大別した。後者は小説以外のものを含むのであるが、殆どが文科系としては思想・哲学などで、随筆、考え方、その他、理科系としては生物学、科学概論、電気、コンピュータ、数学、その他である。統計をとるためにかなり無理を承知でわけてみた。表3には出ていないが教養の中の文科系と理科系の比率は2対3で理科系が多いのは興味深い。また、マンガの雑誌を書名にあげてもよいといったが、1～2名が書名と作者名を書いたが、短評はなかったので省略した。あるいは戯れかもしれない。

2) 小説を全く読まぬものの数値が、一学期末までの期間にも夏期休暇期間中にも45%、48%とかなり高率であったのは意外であった。これは、週刊紙、マンガ雑誌、TV、ラジオなどの影響かも知れないが、小説に対する読書が低下していた。

3) 教養書(呼称に問題はあ)として分類した本を全く読まぬ者の割合は、期間(1)と(2)で夫々14%と20%であり、小説に較べて著しく低い。やや救われた感がある。

4) プレテストの読書調査の時とは別に、授業後に読んでいる雑誌、週刊紙、新聞の調査(大学の図書館利用を含む)をした。雑誌を読んでいる率は全体として54%であり、一般雑誌19%、科学誌14%、欧文誌9%、医学誌2%という割合であり、月刊誌をよまない者は26%であった(表4)。

また、本学附属図書館の資料から昭和56年度の図書館からの学生の貸出統計は表5で、これは、昭和55年度と56年度入学の計200名(休学を除く)の統計であるので、昭和56年度入学者の図書館利用率を貸出者数と貸出冊数から割出すことは出来ない。しかし、表の各数値を $\frac{1}{2}$ としてみても一般図書の貸出人数、貸出数ともかなり低い。夏期休暇に入る前の6月の長期貸出人数も冊数も夫々0.6人と0.84冊で1人1冊の域に達していない。やはり図書館利用による読書意欲は低いと感ずる。

以上のことに対するまとめとして、伝統の全くない学年進行中の本学では、新入生を受入れてからの数カ月間は読書に対する取組み方の指導に何かが抜けていると感ずる。上述した各統計がこのことを示めしていると考えられる。本学には、学生10人に対し教官(教授または助教授が当たっている)1人の指導教官制度がある。この制度を活用することによって、教壇からではなく、例えばコーヒーを飲んだり、休日に山歩きを共に楽しむ語らいの裡に読書を含めた適

切な指導が行われるのがよいと考える。これは部活動、サークル活動でもよい。

Ⅲ 臨床医学序説について

1. 医学の進歩と生涯教育

他の領域も同じかもしれないが、特に医師は一生自学自習を積極的に行わねばならない。本学の基本構想の教育方針には次のように述べられている。“知的好奇心を喚起し、医学の基本的知識並びに技術を習得せしめると共に、医学の特性として卒後も引き続き自ら学び自ら研究する態度をもつ医師並びに医学研究者の養成を基本とする。”云うことは容易でも実行は仲々困難である。このことを念頭におき、生涯教育の必然性に関する授業は次のように行っている。

教育の一般目標（GIO）としては、“医学・医療の進歩と生涯教育の必然性を学び、そのための行動として自学自習を身につけること”である。

具体的には近着の手許にある医学雑誌、例えば小児科学会雑誌の目次を学生に提示する（表 6）¹¹⁾。学生に対し、この学会誌の目次中に筆者が大学卒業時点までに習ったことと直接関連するものは14題目中僅かに1～2題にすぎない。この事実、大学卒業時点で修得していた臨床医学の知識や技術は数年の間に大巾に変化し、進歩してゆくことを示す。また、卒業後ある臨床科を選んで専門教育を受けても病院に赴任後、あるいは開業独立後でも医学の自学自習を怠ると臨床家として間もなく医学の進歩に遅れてしまうことを教えるものである。その意味で生涯教育の為の姿勢と行動——常に医学雑誌から新知識の導入を心掛けると共に研究的診療による学会発表や出席、講演会、研究会、グループの症例検討会などへの積極的参加の重要性を述べる。医学の分野で、ここ20～30年間に著明な進歩を遂げた、あるいは進歩しつつある領域、変化の起った領域を、学生を誘導しながらあげさせる。それらの項目を黒板に記す（表 7）。表 7 の項目の夫々につき 5～10 分間づつどのように変貌し、あるいは進歩したかを具体的に説明する。例えば、フレミングのペニシリンの発見に始まる抗生剤の進歩の歴史とそれに伴う感染症の変貌、一例をあげれば、環境保健の充実、栄養の改善、結核予防法の成立と相俟って抗結核剤や BCG 接種により結核が現在の状態まで激減したことをあげ、これに至るまでの先人の努力と苦闘を紹介する。と同時に参考になる本を紹介する。

2. その他の題目の講義に関して

生涯教育では学生に質問をし授業を進めたが、講義中学生の気魄が余り感じられなかった。講義方法を改め、学生にテーマを与え、学生がその項目を発表することとし、筆者は助言、重要な点のチェック、全体のまとめの講義を20～30分するように変更することを試みた。この方法の follow-up はまだ出来ていないので成果はまたの機会に譲る。

講義の終りの10分間程を利用して学生の健康に関する認識の調査を試みたものの成績の一部、睡眠時間や食物に関するものを表 4 にあげた。本表の雑誌類については既述した。睡眠時間、食物（表にはないが調査した項目は運動、起床・就寝時間、朝食を摂るか否か、実施中の健康法、他）に関しては、医学部志向学生としては先ず先ずのものとする。これらの調査結果は、

次回の講義の終りに知らせると共に短評を行い、医師を志す者として先ず自己の健康に関心を持つようにすると共に健康維持の為の教育を試みた。

Ⅳ おわりに

社会では医の倫理が喧しく論ぜられ、マスコミの非難は激しい。然し、私は医の倫理に関して倫理的講義は、時間の制約もあり実施しない。理由は、医の倫理は押しつけられて実行するものではなく、各人の心の中に存在するものと考えるからである。医の倫理に関し、私が学生に知っている事は次の2点に要約される。(1) 人体解剖実習に入り、初めて屍体にメスをあてる時、献体された方の御霊に対して恥ずかしくないだけの勉学の努力をしたか。(2) 臨床実習に入る時、受診する患者が——例えば若い女性が肌をさらす時その患者に対して恥ずかしくないだけの努力をしたか。以上の2点を自問自答して実習に臨む事を要請している。努力不足と感ずる学生は更に努力してもらわねばならない。他を欺くことは出来ても自己の心を欺くことは出来ないからである。

本稿では、試行錯誤を重ねた医学概論Ⅱ（実際には臨床医学序説）の2年間の講義の経験を顧みて、現在の本学の新入生の状態に関し読書の調査成績から分析を試みた結果、一般教育の重要性を再認識し、私見を述べた。

医学概論の講義に先立って行ったプレテスト、その他の調査により本学の一回生は入学半年経ってもまだ読書志向が低いことが明らかになった。これは他の新設国立医大でも調べれば同じかもしれないが、本学の新入生は読書面、思想面では文字通り無垢に近い状態に置かれていることが推定される。このような事は、苛烈な受験戦争のなせる術であり、現状ではやむを得ない面がある。従って、このような状態にある学生の読書指導をどのように行うかは、教官の重大な責任であり、いま創られつゝある本学の学風を培い、樹立してゆく上に深刻な影響を及ぼすであろう。

視野を広く持ち、物事の本質を洞察することの出来ない、思想的な批判力のない学生は、何かの洗礼があれば一溜まりもなく感化され、呑みこまれてしまうであろう。これは極めて危険な状態である。押し寄せて来る影響力が右であれ、左であれ、それを批判し判断するための基盤は、今の一回生の学生はもとより、あるいは更に上の学生にも欠けているように見える事が懸念されるのである。

表1 医学概論 I

主として自然科学と基礎医学の結び付きに重点をおいて
講義

- I 序 論 : 医学概論の講義を始めるに当って
- II 自然科学の発展の歴史 : 物質の概念、熱とエネルギーなど
- III ビタミンB₁の発見と研究の歴史
- IV 医学の発展の歴史 : 主として基礎医学について
- V 生命の本質 : 1. 生物の特性
2. 生物と無生物の間
ウイルス、パイロイドを中心として

表2 医学概論 II (臨床医学序説)

- I 医学の進歩と生涯教育
- II 生体の感染に対する防御機構
- III 人の一生
- IV 医療について
1. 医の倫理
 2. 医療の歴史
 3. 医療制度 13 15
 4. 病 院 16 17
 5. 医療に携わる人々 12 13 14 15

表3 プレテストにおける読書調査

読了冊数		0	1～3	4～6	7～9	9<
期 間	小 説	3 9 (45%)	4 0 (46%)	4 (5%)	3 (3%)	0
	教 養	1 2 (14%)	5 4 (63%)	1 5 (17%)	5 (6%)	0
夏 期 休 暇 中	小 説	4 1 (48%)	3 5 (41%)	6 (7%)	3 (3%)	1 (1%)
	教 養	1 7 (20%)	5 7 (66%)	1 2 (14%)	0	0

註 数字は実数 () 内の数字は%

表4 入学後半年経過した学生の生活調査 *

1. 雑誌類購読傾向 (図書館利用も含める) **

購読誌	一般誌	科学誌	医学誌	欧文誌	その他	マンガ	雑誌読まない	週刊誌	新 聞	英 字 聞
百分率	19	14	3	9	10	16	23	22	98	6

N=91

2. 睡 眠 時 間

時 間	6～7	7～8	8～9	9～10	計
百分率	6	54	30	10	100

3. 食事に関する注意 **

均衡重視	特別に注意しない	過食を慎む	塩分注意	野菜をとることに留意
77%	8%	5%	7%	34%

* 異った日に調査しているので調査毎に出席者数が異っている。

** 重複したものを含めているので百分率合計は 100%をこえる。

表5 昭和56年度附属図書館からの学生の貸出統計

貸出	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合 計
* 学生 数	一般	63	92	120	50	8	68	92	120	69	31	76	5	794
	専門	60	94	115	73	7	162	204	227	217	154	220	21	1,554
	小計	123	186	235	123	15	230	296	347	286	185	296	26	2,348
** 冊 数	一般	85	110	168	71	9	105	131	182	98	43	117	7	1,126
	専門	72	134	167	141	13	243	328	358	347	220	390	42	2,455
	小計	157	244	335	212	22	348	459	540	445	263	507	49	3,581

註 * 昭和56年度の学生総数は1学年 100名で、2学年あわせると200名である(休学者は除く)

** 2学年10月から、専門課程の教育の一部が始まる

表6 日本小児科学会雑誌¹⁰⁾

第85巻 第9号 昭和56年9月1日発行

ACTA PAEDIATRICA JAPONICA Vol. 85, September. 9, 1981

総会予告 (第三報)

説 苑

成分輸血……………長尾 大…………1125

診療的研究

1. 新生児原発性副甲状腺機能亢進症の本邦初例について……………松尾 雅文, 大北 和彦
竹峰 久雄, 藤田 拓男…………1133
2. プロスタグランディンE₁(PGE₁) 投与例における骨膜肥厚
と生検所見……………沖島 資洋, 佐藤 雄一, 松岡 裕二
山元 一裕, 先成 英一, 早川 國男…………1141
3. 初診時著明な好中球減少を伴った先天性無ガンマグロブリン
血症……………杉尾 嘉嗣, 小林 邦彦…………1150
4. 沈降法 (Sedimentation Method) による尿中細胞診の意義 ……川口 洋, 西村 昂三
細谷 亮太, 吉田 滋彦…………1155
5. 成熟児脳室内出血の臨床的検討……………川上 義, 曾根 良治
島野 了, 高田 充彦, 赤松 洋…………1163
6. Hypergammaglobulinemic purpura の女児例……………高見 瑛, 島袋 直哉, 田口 勉…………1171
7. 極小未熟児における慢性肺障害 (Chronic lung disorders
CLD) の検討 第1編 CLDの発症状況について……………戸 莉 創, 小川雄之亮
三河 誠, 後藤 良治, 安井 洋二, 川瀬 淳, 稲川 昭
西田 朗, 渡辺 勇, 鬼頭 秀行, 董 貴章, 和田 義郎…………1178
8. 同上 第2編 CLD児の中枢神経系後障害の発症状況について……………同 上…………1182
9. 高カルシウム血症を呈した小児悪性腫瘍の治療経験……………本郷 輝明, 竹廣 晃
五十嵐良雄, 室 博之…………1188
10. Ornithine transcarbamylase 欠損症の高アンモニア血症に
対する治療—安息香酸ナトリウム投与の試み—……………児玉 浩子, 野瀬 幸
田尻 仁, 牧 一郎, 佐野 哲也, 原田 徳蔵, 甲斐 浩, 藪内 百治…………1198

基礎的研究

1. 小児急性白血病ならびに先天性好中球遊走不全症における
好中球走化性に関する研究……………諸沢 博徳…………1204
2. 宮崎市における児童・生徒の血清脂質値およびリポ蛋白値に
関する疫学的研究……………浜田 恵亮, 田中 朋子, 山元 一裕, 先成 英一, 田原 正英
山内 良澄, 竹井 学, 吉井 理, 政所 治道, 前村 友絵
鈴宮 寛子, 齊藤 幸代, 沖島 資洋, 松岡 裕二, 佐藤 雄一
大堂 庄三, 早川 國男, 木田 信章, 荒武 八起, 大滝 幸哉…………1214
3. 各種腎疾患の免疫学的検討—特に血清補体価と好中球遊走因子の
阻止因子活性を中心として……………小坂橋 靖…………1222
4. 口腔領域のminor anomalyに関する研究 第一報 一般集団幼児
における歯牙硬組織の minor anomaly の発現頻度について……………深田 英朗, 鈴木 克美
山田 博, 前田 隆秀, 大竹 邦明, 赤坂 守人…………1238

地方会抄録 (1243) 雑 報 (1258) 書 評 (1259) 海外文献抄録.

編集後記

表7 学生が指摘した最近20年間に著るしい進歩あるいは変化した臨床医学の分野（昭和56年度）

- | | |
|--------------|------------------------|
| 1. 抗生剤の発見と進歩 | 6. 角膜移植, 腎移植, 骨髄移植 |
| 2. 予防接種 | 7. 医療機器の進歩・発達 |
| 3. 悪性腫瘍の治療 | 8. 老年医学の必要性（老人の増加） |
| 4. 免疫学の進歩 | 9. 治療医学から予防医学, 更に健康増進へ |
| 5. 食物と疾患との関係 | |

文 献

1. 医学概論 第一部 科学について 澤瀉久敏 誠信書房 昭55
 第二部 生命について 〃 〃 〃
 第三部 医学について 〃 〃 〃
2. 新医学序説 吉利 和, 中川米造 篠原出版 昭54
3. 医学序説 田所一郎編 同文書院 昭50
4. 臨床医学の論理と倫理 砂原茂一 東京大学出版会 1974
5. 医学概論 人間と科学 産業医科大学講義集（1979） 1981
6. 医学概論 心と体, 男性と女性, 東洋と西洋, 人間と環境
 産業医科大学講義集（1980） 1982
7. 医学と医療の問題点 上石一男 新医療出版社 1972
8. 医学校における「医学概論」の授業についての調査
 中川米造 医学教育 9: 379, 1978
9. 医療における人間性について 河合隼雄 日本医師会雑誌 84: 887, 昭55
10. 死の受容 ガンと向きあった 365日 吉岡昭正 毎日新聞社 昭55
11. 日本小児科学会雑誌 第85巻9号 目次 昭56
12. ヘルスマンパワーの将来予測と調整
 ——医師数について—— 方波見重兵衛, 金子 功 日本公衆衛生会誌 27: 287, 1980
13. 国民衛生の動向、厚生 の指標 臨時増刊 第29巻第9号 昭57
14. 看護婦需給に第二次七カ年計画 社会保険旬報 No.1304: 17, 昭54
15. 救急医療はなぜ嫌われるのか 佐野 恵 科学情報社 広報堂出版 昭52
16. 日本の教育病院（大学病院を含む）
 の現状と将来 日野原重明 日本医事新報 No.3051: 44, 昭57
17. ベッドでつづった病人のための
 病人学 武見太郎 実業之日本社 昭56